

淀川流域中下流域バスツアー
(平成15年12月14日)

1. 区役所～巨椋池跡

金井所長（都市文化研究所）

こんにちは、都市文化研究所の金井と申します。よろしくお願いします。それでは今日の行程を説明させていただきます。

平安時代から江戸時代ぐらいまでは、巨椋池という池が三川が合流する場所にあつてそこに淀川の水を溜めたらしいんですね。その巨椋池の跡をバス車中から見ます。20世紀初期に干拓が始まって、ほとんど埋まってしまったのですが、ただ洪水があると、水は昔のことをよく覚えていて、元の池の跡に水が溜まるらしいです。行っていただくとよくわかるのですが、私が下見にいった時に巨椋神社というのがあって、この神社が池のほとりにあったようです。池の南の方には、伊勢田という地名があるのですが、そこが昔の湖岸で集落だったようです。

それから樟葉に向かいまして、寒い中ですが、くずはワンドで小川先生と河合先生に投網を打ってもらいます。また、天候が良ければ河川敷で食事をいたします。その後、枚方に向かいまして、淀川の成り立ちがわかる淀川資料館で見学をしてもらいます。そこから河川敷の道路を通過して、淀川大堰まで向かいます。淀川大堰は新淀川の始点なんです。そこから下流の水は塩水なんです。その大堰の上を歩いてもらいます。さらに時間があれば一番河口の西淀川区の矢倉緑地に向かおうと思っているのですが、時間の都合で中止するかもしれません。

それでは、巨椋池に到着する30分ほどの間に、淀川ネイチャークラブのビデオを見ていただきます。

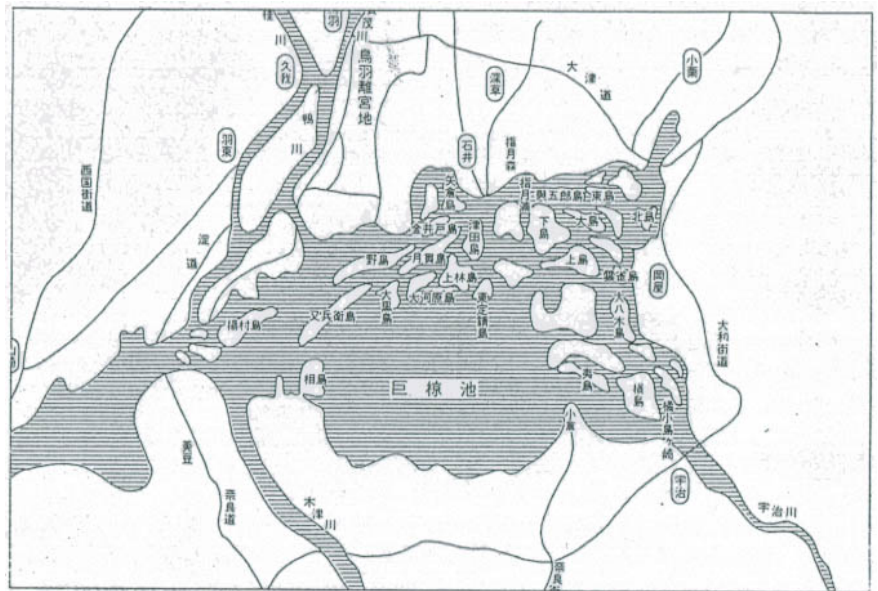
（淀川ネイチャークラブのビデオ上演）

2. 巨椋池跡付近

金井所長

それでは、今日お配りした資料を見ていただけますか。豊臣秀吉が堤を作る前の巨椋池の地図がありますよ。池の中に島がたくさんありますよね。今の京阪電車の中書島駅もこの辺りです。

この地図を見ますと、宇治川が右下から流れ込んでいます。これが秀吉が土木工事をする前の巨椋池です。



秀吉によって堤が築かれる前の巨椋池

秀吉は普請狂いと言われるほど工事をしていて、旭区にも文禄堤という堤をつくっているのですが、この巨椋池にも大きな堤をつくってしまして、さっきの淀川は宇治川と巨椋池が分かれていますよね。この宇治川と淀川を分けるような島を埋め立ててつくり、地図上に巨椋という地名がありますよね。ここに先ほど説明した龍を祀っている巨椋神社があるんです。

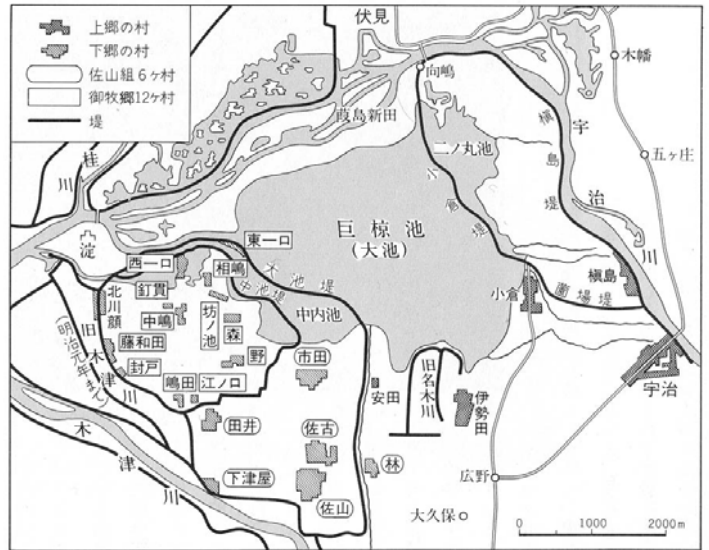
巨椋池を通過して北上すると伏見に出るんですね。秀吉は伏見を人工的につくって、伏見を通して京と奈良を結んだそうです。そのために巨椋を通過して伏見に向かう街道を大和街道といったそうです。これは宇治川と巨椋池を分けるために秀吉がつくった堤なんです。奈良に行くにも大坂に行くにも、伏見という港を通るように、戦略的につくったんです。その伏見に伏見城をつくって、秀吉が住んだんです。ちなみに、右下の地図の左端に淀城がありますよね。ここに自分の愛人である淀君を住まわせていたそうです。もともとは淀の方が京都に渡るときのメインの津だったんですが、淀の橋を取ってしまって、伏見を通らないと京都に渡れないようにしたそうです。伏見を通らないと奈良に行けず、伏見から船に乗らないと大坂に行けないというように、伏見を交通の拠点にしたんですよ。今でいう都市計画を秀吉も行なっていたんです。

幕末に寺田屋事件がありましたよね、とにかくここは本陣が4つあるんですよ。大名も江戸に向かう際、必ずここを通過していくんですよ。今の伏見区からは想像ができませんが、伏見港という港がありました。伏見から三十石船が出て、天満橋の八軒屋に出るんですね。

ある方は東海道は五十三次ではなく五十七次だったというんですね。五十七というのは、伏見と淀、枚方、守口の4つの宿を入れると、江戸から大阪まで東海道五十七次になるらしいです。最近の教科書を見ると、東海道五十三次とは書いていないんですよ。五十七次になっているんですよ。特に大阪の方が書いている教科書には、五十七次と書いていますね。

今バスは巨椋池のど真ん中を通過しています。右手に見える森がちょうど巨椋神社があるところです。巨椋池は670haの池だったそうで、渡り鳥もたくさんいたそうです。また、ドジョウやフナも獲れる大食糧基地で、飢饉でも巨椋池の食糧を食べていたら生き残ったそうです。そういう魚の宝庫でもあったそうです。ちなみに120万年前までは、京都も湾だったらしいですよ。

それでは、小川先生に巨椋池の解説をお願いします。



「上郷」と「下郷」

干拓前の巨椋池周辺



巨椋池は魚の宝庫でした

小川先生（淀川流域環境委員会委員）

小川です。皆さんおはようございます。今日もどうぞよろしくお願いします。

今日配られた資料の最後のページをご覧ください。今日のバスツアーの地図が出ていていると思います。黒い点を打っているところが、バスツアーの観察ポイントなのですが、この地図で見ていただきたいのは、淀川流域における巨椋池の位置を見ていただきたいのです。巨椋池跡ということで斜線が入ってい

ますよね。これは金井さんの説明があったように、秀吉が宇治川から切り離した後の巨椋池なんですね。元々は宇治川が直接巨椋池に流れ込みまして、そしてまた淀川に流れ込んでいくという構造になっていたんですね。先程金井さんに的確に説明していただきましたが、これはダムの役割を果たしていました。

次に、秀吉が土木工事をする前の巨椋池の地図を見てもらいたいのですが、宇治川が巨椋池に流れ込んで、北から鴨川と桂川、南には木津川がありまして、今日見ていただく淀川に流れ込んでいる3つの川は、すべて巨椋池に流れ込んでいました。なぜこのような川の流れてきたといいますと、木津川の横に奈良道と書いてあり、またその横に西国街道というのがあるんですが、これがちょうど大山崎、奈良道と書いてある方は男山が張り出して、自然にこのような構造ができていたんです。琵琶湖や木津川、桂川の水が、いったんこの池に溜められた形で淀川に流れていくんです。こういう場所を水が遊ぶと書いて、遊水地帯というんです。だから、大雨が降っても、いったん遊水地帯に溜まり、水がコントロールされるんです。淀川の水は遊水地によって自然のコントロールが効いていたんですね。

巨椋池は周囲が16kmで歩くと4時間ぐらいかかる大きな池だったのですが、これがなんと一年間の降水量で10倍ぐらい面積が変化したといいます。ですから冬には小さくなり、夏には冬の面積の10倍に増えるような大きな池になったのですから、ここで遊ぶ水がいかに多かったということなんですね。こういう自然環境の中で、淀川の水生生物がはぐくまれてきましたので、まさにその代表であるイタセンパラもこういう環境を好んで生活していたんですね。巨椋池の水生生物が、今の淀川の生物の代表種になっているといっても過言ではないと思います。今日一日を通して、淀川がどうなっているか、また淀川の生物がいかに苦しめられて生活しているのか、その状況を目の当たりにしてもらい、今後の淀川を是非考えていただきたいと思います。以上です。



巨椋池跡には、現在、広大な農地が広がっています。

金井所長

小川先生の話で気づいたのですが、巨椋池の水深は1mからせいぜい2mだったんですね。だけど大きさが794haあるので、794ha×2mの水をいったんここで溜める事ができるんです。これは天ヶ瀬ダムの代わりになっているんです。今ライン川では、ダムをやめてダムの代わりに昔の遊水地に戻そうという動きがあるんですね。というのは、ドイツも日本と同じように畑が余っているんです。それを国が買い取って、遊水地を保全しようとしています。それをもし淀川でやるとしたら、巨椋池を遊水地にしてすればいいんじゃないかと思います。ドイツでは10箇所ぐらいやっているとある本で読みました。

秀吉は大土木事業をする人で、大阪の下流域に枚方までの護岸を全部つくった人なんです。大阪も同じように昔は八十島といわれていまして、河口部に福島とか柴島など「島」のつく地名がたくさんありますね。巨椋池の島を見ても分かりますように、20も30も島があったんですよ。淀川水系には川のなかに島がたくさんあったというのが元々の姿なんです。いまは中洲がほとんどないですが、昔はたくさんあって、旭区で調べたのですが、昭和の初期ぐらいには、中洲にたくさん畑があったらしいです。

皆さんの左手が巨椋池の跡ですが、今は何が住んでいると思いますか。ここら辺は、小さいニュータウンがたくさんあって、600～794haに今では10万人も住んでいるんですよ。ですから今、遊水地に戻

すには池の真ん中の畑ぐらいでしかできないでしょうね。

これで、巨椋池を去ります。いまから、桂川と宇治川と木津川の3川が合流するところに向かいます。今から行くところは、秀吉の時代の言葉でいうと「淀」という場所です。

もう少し行くと、右前方に明智光秀と豊臣秀吉が戦った天王山があるんですね。その山は淀川の北側なんです。南側には男山があります。その男山と天王山に挟まれて狭くなって、そこから上流が池になっていたんですね。私は日本史を教えているんですが、戦というのは大体、天王山と男山のところがくびれた地形をしているんですが、そこで決戦するんですね。幕末の鳥羽伏見の戦いでもここが決戦地でした。

小川先生

先程、金井さんから、ヨーロッパでは遊水地を見直す動きがあるという話がありましたが、淀川の水制の発案者であるデレークという人がいるのですが、この方が淀川だけではなく、淀川水系全体を考慮して、砂防ダムをつくったり、「治水をするには山を押えなくてはならない」という考えを持っており、「巨椋池を遊水地として残そう」というアイデアを持っていたんですね。しかしながら、これがなかなか日本の食糧事情に合わなかったことと、秀吉が宇治川から巨椋池を切り離して以来、巨椋池の水質が悪化したんです。これはやはり川の一部であった時代には水質がよくて伏見では湧き水があり、お酒なんかもつくっていたんです。伏見は非常に水に恵まれたところだったのですが、巨椋池の環境も悪くなっていったということで、結局、池をすべて埋めて干拓することになったんです。その結果、淀川を守るために、たくさんダムをつくることになってしまい、今の淀川になっているんです。

私も河合先生も参加させていただいている淀川流域環境委員会は、自然豊かな淀川を目指して環境を考えているわけです。その委員会で今後30年の淀川をどのようにつくっていくのかという、河川整備計画が近々できあがります。その元となる提言書が今日の資料に入っております。この議論をする中で巨椋池を復活させようという話も出てきております。まだまだ夢物語ですが、本来の淀川の環境を取り戻していこうとする中で、巨椋池の持っていた遊水地としての治水機能とともに自然をはぐくむという意味でも非常に大事な場所だったんですね。その場所をバス車中から眺めていたんです。

もう通過してしまったのですが、淀の競馬場が宇治川の対岸にあります。その競馬場の真ん中に池があるんですね。この池が当時の巨椋池の一部であったといわれております。数年前にその池を調査する機会があって、生息する生物を調査したのですが、残念ながら珍しい魚はいなくて、外来種のブルーギルがたくさんいました。ただ、魚はいなかったのですが、二枚貝のなかに琵琶湖固有種のメンカラスガイという人間の顔ぐらいの大きな貝が、たくさん残っていることがわかりました。

3. 三川合流地点

河合先生（淀川流域環境委員会委員）

今、右手に見えていますのが、宇治川です。加えて、北から桂川、南から木津川の三川が合流してくる地点に向かって進んでいます。この正面に見えている赤い橋ですけれども、右手が宇治川ですね。左手の方が、木津川なんです。この赤い橋は、「御幸橋」と書いて「ゴコウバシ」と呼んでいます。この橋は随分老朽化して、つい最近新しい橋に付替えました。

今からバスを降りて見学していただくところが、「背割り」といいまして木津川と宇治川の間に堤防が延びているんですね。ここはかつて松林だったのですが、今はその松林が枯れて、桜並木になっているそうです。ですから桜の季節にはたくさんの人がここに訪れます。京阪の八幡駅からそんなに遠くないので、桜の季節に来ていたくといいかと思います。それではバスを降りていただいて、川に向かいます。



木津川背割堤地区。

河合先生

今皆さんの目の前に流れている川が木津川です。後から御幸橋の上から川を眺めていただこうと思っております。皆さんはもうお生まれになっていたと思いますが、伊勢湾台風の時は、ここまで水位が上がったということなんです。ただ伊勢湾台風は淀川にそれほど多大な影響を与えたわけではないのですが、それでもここまで水位が上がったんです。



基礎部分が水面よりも上に来っており、河床が低下していることがわかります。

この場所では、御幸橋の橋脚を見ていただきたいと思います。橋脚を見てもらうと、少し形がおかしいことに気づきませんか。コンクリートの柱の下に楕円形の基礎が見えていますね。これは橋脚の根入れ部分で、元々川の底に埋まっていたものなんです。以前は、根入れ部分の一番上から1mぐらい上の高さまで水があったのですが、どんどん河床がさがる「河床低下」ということが起こった結果、今のように基礎部分が水上に出てしまっているんです。

川というのは、水を運ぶこと以外に、土砂を運ぶという大きな働きがありますが、淀川では、上流に多くのダムができて、川砂が流れなくなっているんです。

それが、河床が下がる原因の一つとなっています。また現在も、下流でコンクリートの骨材にするための土砂を川から採っているんです。それが河床低下に拍車をかけています。河床低下が起こると、なぜ駄目なのかといいますと、だんだん川の勾配がなくなってしまうんです。それにより、水の流れが悪くなったり、ワンドの水が抜けてしまうんですね。

少しこのデータを見ていただきたいのですが、赤線が1975年、黒線が1998年の河床高（川底の高さ）なんです。淀川大堰が河口から10km地点にありまして、37kmがちょうど今いる地点なんです。グラフを見ますと、淀川全体の河床が下がっているのがわかります。特にこの辺りはダムによって上流からの

土砂の供給量が減っているんですね。河口の辺りで河床高が低いのは、土砂を浚渫しているということなんです。グラフの1975年の部分を見てもらいますと、この地点でも2mぐらい河床高が下がっているんです。ですから御幸橋ができたのは1975年よりもっと古い時代なので、今では4mぐらい河床高が下がっていることになります。徐々に下がっているものなので長い目で見て行かないと、気が付かない事なんですけどね。



グラフを使って説明する河合先生（右）。
左は小川先生。

参加者

この地点の水面は、大阪湾から何mぐらい高いのですか？

河合先生

大阪湾の最低潮位から河床高でいうと6mぐらい高いです。ですから、水面の高さを足すと8mぐらいですね。

淀川の水面勾配の話ですが、淀川大堰から枚方までの水面はほぼフラットなんです。ですから、この御幸橋から枚方までは、水の流れがあるんです。枚方から河口までの15kmでは水面がフラットなので、普段は水が流れなくなっているんです。

小川先生

この木津川は、河床低下の結果、以前の川の様子と少し変わりましたが、30年程前の淀川環境を今でも残しています。15年ほど前に、ここではワンドという名前ではなく「たまり」と呼んでいる河原にある池で、非常に状態がいいイタセンパラがたくさん見つかりました。しかし、密漁によって非常に数が減りまして、一時期姿を消してしまいました。最近、少し見つかっているのですが、現在の旭区の城北周辺のような環境が30年前の淀川下流域にはあったんです。それが30年の間に変えられてしまったということなんです。

ちょうど橋の上からは、ヘリコプターから見たような景色を見ることができますので、本来の淀川の姿を、御幸橋の上から見ていただこうと思います。橋の上に行きますと通行量が多くて説明がしにくいので、先にここで説明を行いたいと思います。



御幸橋橋脚部分のたまり。

川というものは、必ず蛇行します。まっすぐには流れないんです。いま、皆さんが立っている場所は水の流れが強いところで、「水衝部」といいます。その対岸側には「水裏」という流れが弱いところがあります。川は土砂も運びますが、この水裏には土砂が溜まるんですね。水の流れが強い水衝部は、土が削られて淵になっています。ですからこちら側が淵で、対岸が砂の溜まった砂洲になっています。皆さんの目の前にある砂洲には、植物が育つための栄養を含んだ土砂がたくさん

んありますので、放っておけば植物が生えるはずなんです、この砂洲には植物がまったくありませんよね。これは何故でしょうか。今は、水の流れが穏やかで、水が少ない季節なのですが、水の多い時期には、今植物が生えているところにも、かなりの勢いで水が流れます。その水の流れによって、植物が非常に生えにくい状態になる訳ですね。そんなところでできあがる、「たまり」がいくつかあるのが分かるのでしょうか。例えば御幸橋の下に、ちょうど橋脚部分が深ぼれてできた「たまり」がいくつかあるんですよね。ああいう水溜りの水深は、非常に浅くて、魚類の稚魚が育つには格好の場所となります。このような所に植物が生えてしまうと、魚は生活しにくくなるのですが、今の川の環境だと「たまり」が維持されます。

それでは御幸橋の上まで出ていきまして、真上から「たまり」も見ることができますので、是非ご覧ください。それでは御幸橋に移動します。

河合先生

真上から見ますと、水深もよくわかりますし、水の流れも非常によく分かると思います。今皆さんは、川の上流に立って下流側を見えています。川は下流を向いて右側が右岸、左側が左岸になります。この辺りは、ちょうど右岸側が「水衝部」で、特に川の流れが強い部分が右に蛇行しておりまして、水のあたる所は水深が深くなっております。すると左岸側には、「水裏」という土砂が堆積してできた砂洲が発達するんですね。でも、この砂洲があるところには植物が生えていない。その砂洲の中にいくつかあるのが、「たまり」なんです。こういう場所は、春には魚が産卵したり、稚魚が育つ、非常に重要な場所となります。



増水時に水に浸かる部分(写真右側)はきれいな砂洲で、植物は生えていない。

これが「たまり」ですが、この季節は魚がたまりにいない季節なので、ここから見ましても魚の姿を見ることはできないのですが、季節が変わって春から初夏にかけては、いろんな魚がこのたまりに入ります。春になりますと、水位があがりますので水辺に生えている植物が水没するんですね。今、たまりの周りに生えている赤い植物は蓼という植物の仲間で、その植物が水没すると、産卵する魚がかなりの数やって来ます。こういう季節になりますと何にも役に立たない場所に見えますが、意外と魚類にとっては大切な場所になっているんです。まだこのたまりが出来上がってあまり時間が経っていませんので、おそらく2枚貝の仲間はまだ入っていないと思いますが、季節が変わりますと、イシガイやドブガイの仲間が入ってきて、タナゴの仲間も産卵しに来るようになるんです。先程も申しましたように、イタセンパラもこの水域にはいましたので、このようなたまりの中で産卵する可能性もあります。

河合先生

今こうして川を眺めていますと、淀川とはだいぶ違う風景なんです、わずか30年前まではこういう風景が淀川の下流にも広がっていたんです。今日のバスツアーの最後に参ります、城北ワンド群にも同じような風景があったですね。そういう時代のワンドと現在のワンドでは、内容がだいぶ違うことをご理解していただきたいと思います。

今ご覧いただくと、砂洲の砂がすごくきれいでしょ。木津川という川は日本でも有数の砂河川なんです。上流で花崗岩という岩石が風化して流されて来ているんです。実はこの御幸橋の近くに京阪電車の鉄橋がありますが、昭和の中ごろまで水泳場があったんです。私も泳ぎにきた思い出があります。

野田研究員（都市文化研究所）

次はくずはワンドに向かいます。かつてワンドがあったところなのですが、河床低下によってワンドが干上がり、現在は人工的にワンドを再生している所です。樟葉の河川敷にあるゴルフ場の駐車場にバスを止めて、そこから 20 分ほど歩いて、ワンドを見に行きます。それから、広大な砂洲が広がっているところがありますので、そこで昼食を取ろうと思っています。よろしくお願いします。



河川敷から三川合流地点を眺める参加者。



4. 楠葉実験ワンド

河合先生

ここがくずはワンドです。先程、御幸橋のところでもお話しましたが、目の前に2つのワンドが見えますが、当初は5つあったんですね。楠葉地区実験ワンド設計という資料をお渡ししていると思いますので、ご覧下さい。

1970年から淀川で本格的なワンドの調査が始まるのですが、その時に皆さんの目の前のあるワンドに「1号ワンド」と「2号ワンド」と名前を付けたんです。楠葉から城北までのワンドには26の名前がついていたのですが、この1号ワンドは、調査が始まった時点で、一番上手にあったワンドなんですね。

この写真は1970年代のワンドの姿で、満々と水を溜めていたんですね。ところが1980年代に入って、どんどんワンドの水位が下がって来るんです。元々冬はある程度干上がりはするんですが、完全に干上がることはなかったんです。そのうちに、夏でも出水した時にしか水が溜まらなくなったんです。そうして魚や生物が生活できる環境ではなくなってしまったんです。最近では、「ここがかつてワンドだった」と言われて初めてわかる場所になってしまっていました。そこで、2001年に土を掘りワンドを復活させました。皆さんの右手に見えるワンドがおとしとしてきて、左手に見えるのが去年できたんです。右手に見えるワンドは本流とは独立していて、今後、下手のワンドは本川とつないでいこうと考えております。

先程の御幸橋のたまりの周りには、それほど草が生えていませんでしたね。1号ワンドはできて1年半近くになるのですが、この程度の短い草しか生えてないんです。下流に行くときよくわかるのですが、水位が変動しない所では草が生えてワンドを埋め尽くし、水面がなくなってしまうんです。ところがこのワンドでは、河床低下で水面が下がってはいますが、水位の変動は見られます。

皆さんの足元を見ていただくと、枯れたヨシの茎がたくさん落ちていますが、ほとんどが川の流れに平行に落ちているのがわかりますね。これは皆さんの足元位まで水位が上がっているからなんです。今年の8月9日の台風と、お盆の台風によって水位が上がってかなりの水が流れたんですね。それでこの辺りまで流れがあったんですね。これもワンドの環境をつくる重要な環境の一つなんです。淀川下流ではもうその環境はありません。



楠葉2号ワンド。中央部で本流とつながっています。



「足元のヨシを見てください」と河合先生(左写真)。水面からはかなり離れた、高い所にも枯れたヨシが流れ着いており(右写真)、台風などで水位が変動していることがわかります。

くずは1号ワンドは、楠葉にお住まいの元清風高校の紀平先生が1970年代の初めから調査をされています。このワンドでは、36種類の魚が確認されており、14種の貝も見つかりしております。ここ最近の調査では、貝が元通りに戻ってくる期待をしているわけです。黄色いブイが浮かんでいますが、これは水質を調査するための機械や貝の移殖をするためのカゴの目印に浮かべているんです。「貝はなかなか自然には移殖してこないだろう」と人工的に移殖をしたのですが、実はもう貝を移植しなくても自然に入ってきているのではないかと思います。

河合先生

この1号ワンドというのは、木津川でイタセンパラが見つかるまでは、淀川ではイタセンパラの生息する最北のワンドだったんです。それが河床低下によって、水が抜けてしまっていたのですが、古くから研究されていた紀平先生の情熱もあって、今の状態にまで回復しています。

それでは「二枚貝の放流実験」と書いてあるプリントを出してください。そこに放流二枚貝という網カゴの中に40～50の貝が入った写真があると思います。何とかこのワンドにイタセンパラを呼び戻そうということで、自然繁殖する貝を待っていても時間がかかりすぎるとということで、網カゴのなかに貝を入れて沈めたんです。上手の1号ワンドに5つほど沈めていて、貝の数としては2～300個ほど沈めたと思います。イタセンパラの産卵は9月から4月の間なので、9月の最初にこれを沈めたのですが、11月の調査で半分の貝が死んでいたんです。人間が無理をして貝を放流してもなかなか上手く行かなかったのですが、私はおそらく自然に貝が入ってくるだろうと思っていまして、何とか貝を放流する前に確かめたいということで、調べました。先程の資料のくずはワンドの航空写真の左下に載っていますが、米粒ほどの大きさの稚貝がワンドの中に入っていたんです。寒い季節に採るのは難しいかもしれませんが、今日も1つでも採ってお見せしたいなと思っています。

こういう稚貝がどのようにしてワンドに入ってくるかご存知ですか。貝というのは這うスピードが非常に遅くて、自ら這ってワンドに入ってくるのは難しいと思うんですね。では、こういう稚貝がワンドに入ってくるのは何故でしょうか。



ワンドで貝を探す両先生。寒くてあまり生き物は採取できませんでしたが、ヤマトシジミの稚貝(下)が見つかりました。

参加者

洪水で流されて入ってくるんですか。

小川先生

それも考えられるのですが、川の貝はもっとすばらしい移動能力を持っているんです。この貝は魚に引っついてくるんですよ。貝はグロキリウム幼生という時期があるのですが、その期間に、2週間ほど魚の体に寄生します。寄生をして栄養をもらうという重要な意味もあるのですが、もっと深く考えれば、その間に移動できるんですね。寄生している2週間で魚が移動してくれると、新天地に移動ができるということなんです。それをくずはワンドが実証してくれたということなんです。貝が自ら移動し、繁殖できる環境がここに出来



上がったことを、この稚貝が証明してくれていると思います。だから人間が手を入れるより、自然に任せることが大事なんだということがわかると思います。

それでは、投網を投げて見たいと思います。どうしてもこの季節は魚が一番取りにくい時期なので、あまり期待をしないで見てください。貝も稚貝は水が温かい季節には水際で観察できるのですが、寒い季節には水際が凍りますので、そういうところは避けて深いところに入ってしまうので、ちょっととりにくい状況なんですね。先に言い訳をさせておいてください。



投網を投げてはみましたが…。この日は残念ながら、魚は捕れませんでした。

5. 楠葉砂洲

小川先生

ここは、楠葉の砂洲です。ここは淀川が誇る、最大級の砂洲なんです。この辺りでは、本流が対岸に寄っていて、かなり川幅が狭くなっております。こちらの岸が水裏で土砂が堆積していて、この辺りには大きな石が堆積してるんです。下流に行けばこういう石はないのですが、下流には砂洲自体が無くなってしまっています。砂洲が残っている所ももっと砂や粘土質のものになっています。

こちらに水溜りがあります。これは増水した時の水が抜け切っていないたまりなのですが、一昨年この場所にたくさんのコイとフナがひしめきあっていたんです。産卵をするために入ってきたものですが、基本的には水が引いていくとたまりから出て行くので、たまりに残されるはずはないんです。では、なぜ魚がたまりから出られなかったかというと、天ヶ瀬ダムで水の流量を調整しているの、急に流すのを止めてしまうんですね。そうすると、魚は急に水位が下がることを予測できないので、このようなたまりに残され



元は川底だったのか、広大な砂洲には大きな石が転がっています。下の写真は、本流近くの砂洲。



てしまうんですよ。そうすると逃げられなくなった魚は、鳥の攻撃に合うんです。その時は大変でしたが、一匹一匹本流まで運びました。ですから、これからは琵琶湖の水位も段階をおって、水位の下げ方も緩やかにするべきですね。



写真中央部のたまりにコイ・フナがひしめき合っていたとのこと。

金井所長（都市文化研究所）

ちなみに、今、左手に見えている山が天王山なんです。サントリーの山崎工場が見えていますよね。

河合先生

それとこの対岸なのですが、淀川を代表する鵜殿なんです。阪急の駅名でいうと上牧あたりになります。対岸の向こう側にタワーが見えますよね。あれが国土交通省の山崎出張所なんです。その下手にヨシ原が広がっているんです。そのヨシ原も現在では衰退して

きて冠水しなくなっているんです。これも河床低下の結果なんですね。その対策として、ポンプを使いヨシ原に水を流すんですね。それである程度は回復しているのですが、現在、先程のワンドと同じように切り下げをして、下がった水面にヨシ原を近付けようとしています。ヨシには地下茎がありますので中抜きをするんですね。この対策もワンドと同じように、完全な復元では無いんですね。本来の復元というのは下がった水面をもとに戻すのが復元なんですね。今はそれができないので、やむなく対策をとっているのですが、これがこれからの自然再生の基準になってしまうのではないかと不安ももっているんです。

鵜殿は「鵜殿のヨシ」としてご存知の方もいるかもしれませんが、雅楽で使われる箏篳（ひちりき）のリード部分に使うヨシを採っています。鵜殿のヨシでないとダメということで、箏篳奏者の東儀さんも鵜殿のヨシを使っているらしいです。

2月にヨシ焼きをするのですが、灰が飛ぶので近隣からの苦情もあり、一度にすべてのヨシを焼けないらしいです。



いつの時代のものか、陶器や瓦などのかけらがたくさん落ちています。



砂洲で昼食。